

## 青年の日常生活における多忙感と退屈感についての予備調査

○橋本 和秀(余暇問題研究所) 山崎 律子(余暇問題研究所)

キーワード： 多忙感、退屈感、青少年の自由時間、青少年の余暇活動、青少年非行  
はじめに

青少年問題については、主に教育的、法的、心理的、社会的側面など、古くから多くの文献や研究がみられる。そして現在においても、重要な社会的課題となっている。とくに現代のように、青少年による凶悪犯の増加、性の逸脱行為の増加、ドラッグや合法ドラッグ乱用の増加などとともに、その低年齢化傾向は、大きな社会問題となってきた。それに伴い、警察庁の少年犯罪や非行に対する方針は、従来までの「少年の保護」重視に加えて「取り締まりの強化」に重点をおく方向にあるという。

また、青少年の余暇についても、従来から多くの研究が行われてきた。それらの多くは、意識、活動など現象的側面から、あるいは心理学・社会心理学的側面からの退屈感、阻害要因、参加効果などである。しかしながら、青少年の非行問題と余暇問題の関連性を、直接取り上げたり、実証する研究は数少ない。したがって一般社会も、両者間に関係があるとは、必ずしも受け止められていない。

青少年の非行あるいは反社会的行動は、その多くは彼等の自由時間に行われる行動とみることができる。またその行動は、社会統制(social control)理論によると、決して彼等の独自の行動ではなく、一般成人社会環境にみられる行動を反映したものと考えられる。それゆえに、青少年にとっては、彼等の好奇心をそそる行動でもある。それらの好奇心をそそる行動も、普通は何らかの社会統制によって抑制されているが、その統制機能が弱まると、非行行動になるものと考えられる。これを裏付けるかのように、社会統制の一つである拘束時間(青少年の場合は学校など)は、青少年の自由時間を減少させていると同時に、一般社会人行動への誘惑も減少させるという示唆もある。

この論理に従うと、学校の週休2日制によって、青少年の自由時間が増加すると、ゆとりが生まれるというよりも、かえって非行が増加するのではないか、という懸念が生じる。このことは、成人社会においても共通する。レジャー時代は、必ずしもバラ色ではないといわれる所以である。

このような状況下において、青少年の自由時間行動を健全化させるにはどのようにしたらよいかを、レクリエーションの視点から包括的に捉え、その解決策を模索しようとしたのが、この調査の背景となった。

まずその手始めとして、青少年の多忙感に着目した。すなわち、現代の多忙化社会は、人々の多忙感を増長させ、むしろ多忙さに価値をおく社会(一種の社会統制)となっている。現実の“多忙さ”よりは、精神的な“多忙感”を抱いているようである。当然この現象は、青少年に反映するものであり、青少年のもつ多忙感が、彼等のレジャー経験を左右する要因となっていると考えられるからである。

一方、多忙感の対極にある“退屈感”も青少年期の特徴としてみられえ。退屈な状態は、彼等の自由時間行動にも影響を与え、自由時間増加は、かえって安易な行動へと駆り立てる傾向があろう。このことは、文部省調査(幼児・児童・生徒の学校外活動実態調査：

文部省生涯学習局青少年教育課：1996）によっても伺い知れる。

自由時間行動の側面からみると、これら多忙感と退屈感は、共に自由時間行動の貧困化を導くことになるという仮説が立てられる。すなわち、多忙感は自由時間行動を制限し、結果的にその貧困化を生じさせる。また退屈感とはもすれば安易な自由時間行動に走るることとなるということである。

退屈感についての研究は多いが、多忙感を一種のタイム・ストレスと見做して、これら両者の関連をみた研究は、最近では Show らの研究がある。(Show, Caldwell & Kleiber: Boredom, Stress and Social Control in the Daily Activities of Adolescents: 1996) この研究に示唆を得て、将来的には本調査の背景にあった課題解決を目指すため、その予備的調査として、本調査を量的および質的な面から実施するに至った。

### 調査の目的

本調査・研究の目的は、学校（拘束時間）および学校外（自由時間）における青年の日常生活における多忙感および退屈感の実態を、次の項目について調査し、今後実施予定の本調査に向けた資料を得ることにある。

- 1) 学校（拘束時間）における多忙感・退屈感と充実度
- 2) 上記に関わる主な理由
- 3) 学校外（自由時間）における上記の事項

### 調査の方法

調査対象： S 専門学校生 131名（男性 76名、女性 55名）

調査期日： 1997年6月17・18日

調査方法： 質問紙による記入回答式（自由記述回答を含む）

学校および学校外について、それぞれ次のような設問を設定し、その理由については、自由記入にした。

「昨日のことを思い出してください。昨日はどう感じましたか？

I 群から一つ、II 群から一つ選んで、○で囲んでください。そして、その理由を記入してください」

#### I 群

- ・忙しく感じた
- ・退屈した
- ・どちらも程々

#### II 群

- ・充実していた
- ・よかった
- ・つまらなかった

### 結果および考察

#### 1 学校における多忙感、退屈感、その充実度および理由

##### 1) 多忙感、退屈感、その充実度

表1は、学校における多忙感、退屈感、その充実度をまとめたものである。

まず多忙感と退屈感についてみると、「どちらも程々」がもっとも多く、次に「退屈」「多忙」の順となった。しかし有意差はみられず、これら三者については約1/3 づつに分

散した結果となった。ただし女性だけみると、「退屈した」と回答した者が、他に比べて少ないことが分かる。

表1：学校における多忙感・退屈感とその充実度(名)

N=113

	充実していた	よかった	つまらなかった	計
忙しく感じた	18 (4)	10 (4)	4 (1)	32 (9)
退屈した	1 (0)	3 (1)	32 (12)	36 (13)
どちらも程々	12 (6)	22 (10)	11 (4)	45 (20)
計	31 (10)	35 (15)	47 (17)	113 (42)

※カッコ内は女性数

次に充実度をみると、これら三者もまた約1/3 づつに分散した。「充実していた」と「よかった」を充実度の高い回答とみると、学校においては、明らかに充実感を抱いている者が多いといえよう。しかし、全体の1/3 は「つまらない」と感じていることがわかった。

さらに多忙感・退屈感と充実度との関係をみると、「忙しく感じて、充実していた」「どちらも程々で、よかった」「退屈して、つまらなかった」という3様の回答に分類できる。すなわち「多忙・充実型」「中庸・肯定型」「退屈・消極型」の3類型となる。

#### 2) 3類型それぞれの主な理由

- ・多忙・充実型・・・授業が面白かった。実技の授業があった。自分の好きな授業があった。暇になる時間がなかった。
- ・中庸・肯定型・・・学校が4時限で終わったから。実技の授業があったから。授業が楽しかったから。みんなと話しができたから。ホームルームがあったから。
- ・退屈・消極型・・・授業が早く終わったから。授業が面白くなかった。やる気がなかったから。眠かったから。友人が来ていなかったから。やりたいことがない。

以上のように、いづれも「授業に対する態度」に関する事項が多く挙げられている。またS専門学校の特質から、実技授業に関する事項も多い。これらの事項は当然としても、さらに友人関係に触れる理由、時間的理由や自分の意欲による理由も挙げられていたことは、学校という場の機能からみて興味あるところである。

#### 2 学校外における多忙感、退屈感、その充実度および理由

##### 1) 多忙感、退屈感、その充実度

表2は、学校外(自由時間)の多忙感、退屈感とその充実度をまとめたものである。

まず、多忙感・退屈感をみると、全体では大きな開きがみられる。「忙しく感じた」と回答した者(37.5%)が「退屈した」という者(20.8%)を大きく上回っている(5%有意差あり)。「忙しく感じた」者と「どちらも程々」と答えた者は、ほぼ同数の結果となった。

また、充実度をみると、全体では約1/3 づつに分散した。女性では、「充実していた」者が「つまらなかった」者に比べ多い回答を示した。男性については、やや「つまらなかった」者の数が多い。

表2：学校外における多忙感・退屈感とその充実度(人)

N=120

	充実していた	よかった	つまらなかった	計
忙しく感じた	25 (13)	14 (6)	6 (2)	45 (21)
退屈した	2 (1)	3 (0)	20 (3)	25 (4)
どちらも程々	16 (13)	28 (10)	6 (2)	50 (25)
計	43 (27)	45 (16)	32 (7)	120 (50)

※カッコ内は女性数

次に、多忙感・退屈感と充実度の関係を見ると、学校における場合と同様に、「忙しく感じて、充実していた」「どちらも程々で、よかった」「退屈して、つまらなかった」の3類型が顕著にみられる結果となった。

#### 2) 3類型それぞれの主な理由

- ・多忙・充実型・・・アルバイトの仕事があったから。遊んでいたから。身体を動かしたから。いつも行くところで遊んだから。デートができた。時間に追われたから。
- ・中庸・肯定型・・・ひとりでのんびりできた。買い物に行けたから。やりたいことが出来たから。昼寝をしっかりとしたから。宿題が出来たから。友人と会えたから。
- ・退屈・消極型・・・やりたいことがない。ひとりぼっちだったから。家でゴロゴロしていた。テレビを見ても変化がない。とくにやりたいこともない。疲れていた。

以上の中で、多忙・充実型はアルバイトに時間を費やしたという回答が多かった。全体的に特徴としてみられることは、多忙・充実型はアルバイトと積極的な遊び、中庸・肯定型はやりたいことが出来たことと友人関係、退屈・消極型はやりたいことがみつからない、ということが挙げられよう。

#### まとめ

本調査は、青年の日常生活における多忙感、退屈感、その充実度と理由の実態を把握することが、直接の目的であったが、総じて以下の実情を捉えることができた。

1) 学校における生活を拘束時間とみるならば、その時間においては、約1/3が忙しく感じて、充実度も高く、その主な理由は当然のことながら「授業」に主点がかかっている。ただし、約1/3の学生は、学校でも退屈感を抱きながら、消極的な姿勢を示している実情が浮かび上がった。

2) 学校外の自由時間においては、多忙感と充実感を抱いた者は、拘束されたアルバイトによることが多く、中庸・肯定型は、自由時間をみずからエンジョイし、退屈・消極型は、レジャー活動選択の貧困性を示しているものと認識できた。

今後は、本調査で得られた結果を踏まえ、をさらにきめ細かく、面接調査も加えながら、それぞれの類型に属する対象に対しての分析を進めたい。